



TITLE:

# パーシバルローエル彼の生涯と事業

AUTHOR(S):

パタソン, J. A.

---

CITATION:

パタソン, J. A.. パーシバルローエル彼の生涯と事業. 天界 1923, 3(26): 33-43

ISSUE DATE:

1923-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159833>

RIGHT:

# 天界第二十六號 (第三卷)

大正十二年  
二月 號

パーシバル ローエル

## 彼の生涯と事業

J. A. パタソン

凡て偉大な事は皆て熱誠無くして成就された例はない。  
——エマスン。

パーシバル・ローエルの人格中には普通以上に科學的上達と商事上の能力とが結合されてゐた。是等が和合せしめられることは稀である。或る天文學上の問題を圖解する圖形や表等は應々經濟記事の金錢欄とは結び合はない。博士ローエルの場合には是等は結合されてゐた。ミ云ふのは彼は數學の大家であつたと同時に實業界の一指導者であつたからである。

彼の嗜好は熱心な成功に富む學生として學者らしく、且つ亦有力な成功に富む商人として實際的であつた。彼は一名門に屬する一員であつた。彼は一八五五年ボストンに生れた。彼の父アウガスタス・ローエルはボストンを有名ならしめた教育

及修養と密接に同一視されてゐる。彼の母は一八五一年の駐英米國公使アルバート・ローレンスの娘であつた。機業で名高い二都市はローレンスとローエルの家族名を帶びて居る。

本文の主人公は一八七六年のハーヴァード大學卒業生であつた。彼は青年時代に卓越せる數學家であつた。そして彼の時代の主なる數學家が彼を其の時代のハーヴァード同志中の最も偉大な數學家の一人だミ云つてゐる。彼の誠に感受的な心は歐洲及東洋の旅行に由つて大いに裨益せられた。七年間忠實に商業に勤勉した後、彼は東京に定住したが、かしこで彼は朝鮮から合衆國への特派顧問官並に外國祕書官に任命された。彼は一東洋帝國のその米國旅行に於ける最初の大使の任を受托した。而して其の朝鮮への歸着に當り彼は其の政府の賓客ミなつた。彼は其旅行記を「朝鮮——朝の平穩の國」：“Chosen; the Land of the Morning Calm”と題して出版した。先達つて我等は「詩人の生活に於ける天文學」に關する博士ワットソンの貴重な説を聞いた。此の我等の主題はその逆即ち「天文學者の生活に於ける詩」を説明する。如何と云へば「朝鮮」：“Chosen”、「極東の精神」：“The Soul of the Far East”及び「能登——日本」の未探險の一角”：“Not a Unexplored Corner of Japan”の如き著書は創造力と魅力とを豊富に有してゐる。尙ほ彼の豐饒な心意は「火星」：“Mars”（一八九五年）「太陽系」：“The Solar

System" (一九〇三年)「火星の運河」"Mars and its Canals" (一九〇六年)「生命の住處としての火星」"Mars as the Abode of Life" (一九〇九年)「各世界の進化」"The Evolution of Worlds" (一九一〇年)の如き書籍、及び智識階級の各種の雜誌、出版物中の多くの論文をも共に實として結ぶに至つた。

一八七七年伊太利人スキアバレリが遊星の火星を組織的に研究中著しい印しの一列を發見するに至つた。そして彼はそれをカナリー canals と稱したが後カナリス "canals" 運河と不正確に譯せられて混亂の源をなすに至つたのである。ローエルは深甚なる興味を以つて是等の發見に追從した。彼の思想は點火せられ、熱心を以つて彼は是等の觀測を擴張し、遂に彼等に基いて火星、從つて他の遊星の住まわる可き事に關する彼の意見を爲したのである。より充分な觀測と正確な記錄をなす爲めに多くの時間を費して天文臺としての出来るだけ善良な場所を探索した。望遠鏡的觀測に對する人なる敵は空氣の感ぜられない渦卷であつて、それは大望遠鏡にはより著しく而して遊星の詳細を混亂せしめるものである。其結果は丁度或人が上手に字を書いた紙一頁を持ち上げて、觀測者の前で、あらゆる方向に振つて、その後其人に對つて何を御覽になりますと尋ねるのミ似てゐる。最善の器械を使つて

る最良の視力も其の頁の上に書かれた事を知るに殆ど進歩も爲さない。ウラニア女神は祕し立てをする。そして彼女の祕密を輕々に言ひ表はさうとはしない。而も彼女が己が神祕の何れかを委ねるに至る迄には彼女の禮拜者より創意と耐忍と直覺と發明力とを要求する。私が「空氣の渦卷流」に云ふ時に私は風を意味してゐない。之等の邪魔な流れは普通の五感には感じ得ない。そして美はしい夜、雲なき空の下にも、又「天の床が輝く黄金、鏤で鏤められた」時にも存在するものである。或天文臺は觀測するよりも寧ろ他から見られたいが爲めに置かれ、そして高い山頂も善いシーイング Seeing に助けにならない。フランスやアルゼリヤ、メキシコ高原及び南アメリカのアンデス山等は順次に訪はれた。然し結局北部アリゾナのフラグスタフに於ける約七三〇〇呎の處にある場所が最後に選擇せられた。其處は空氣が平穩で且稀薄にされて居り、そして煙や砂塵や或人口稠密な中心地の街衢の交通から生ずる空氣の震動を遙か外にしてゐる。而してかゝる事情の下に觀測する天文學者は專問語に於ける最善の「シーイング」を享樂するのである。そして是等の環境の中に大きな圓屋根がその二十四吋屈折望遠鏡と共に一八九四年に設立せられ、其の中心の圍りに臺員一同の家屋を含む可成りの村がやゝに出來上つた。其の後別の圓屋根の下に四十吋屈折望遠鏡が附附けら

れたが、それは遊星の詳細を精密に正確に研究するには駄目な事が知れた。此處で多年ローエルは彼の僚員と共に寫眞的並に分光器的事業の多量を創造した。爲めに彼は天文學者の英靈廟に葬らるゝの資格を得たのである。而して此の天文臺から多大なる數の天體寫眞の幻燈畫板や無比の寫眞分光器による像等が製出された。それに由り學問はしないが感賞的な人々は我等が生き、働き又我等の存在を有する此の宇宙の偉觀の或る概念を引き出す事が出来る。博士ローエルは彼の死後此天文學的事業を進行させ行くに云ふ決意の中に避け所を見出した高貴な野心を有してゐた。而してそれを成就させる爲めに彼は自己の信託人として、學識あり同種の嗜好を有する從兄弟ガイ・ローエルを選んだ。

私は一九一六年七月四日此の天文臺を訪ふ愉快を有した。そしてスリファア氏及びランブランド氏は私が此の協會の一役員なる故を以つて長く記憶すべき町重な歓待を與えられたローエル氏自身はボストンに行つて不在であつた。

ローエル天文臺の設立された一つの主要目的は火星上にある、微細な印しの觀測にあつた。其事實は全く明瞭である、疑問は是等から演繹さるべき適當な結論に在る。世には二つの推論の道がある。一つは確定的に證據立てられた前提から演繹するもの、他は歸納法によるもの、即ち多くの例の或る

特殊的の例の考察及び分類より或る推定に達するものこれである。歸納的方法は觀測された事實の一組を了解し、彼等を眞の原因又は法則に關係あらしめるの目的とする正確な解釋である。海王星が發見せられたのも此の方法に因つたのである。遊星なる天王星の攝動は既知存在の天體の引力に照引しては説明されない云ふ事實が知れた。其處に於て天王星の眞軌道から、それを横道に入らしめる未知天體の位置に關して理論的計算がなされた。換言せば攪亂の事實に知れてゐるが、何處に攪亂者は居るかの問題であつた。我等の知つてゐる様に英文文學者アダムスと佛天文學者ルベリエーが各獨立に働きながら此の問題を解いた。そして海王星は發見せられ、新しい而も未だ知られなかつた太陽系の一員として紹介せられたのである。

さて此處にフラグスタフ天文臺に於ける倦まざる働き手により觀測され、記錄されたものとしての事實がある。彼等の發見には善良な器械及び良好な視力以上のものを必要としたそれには肉眼が見る所のものを了解し解釋する爲めに思想の範圍に働く頭腦を要した。

一、火星は其軸上を二四時三七分二二・六五秒に廻轉する。之れは火星の一日を約四〇秒丈け地球の一日より長からしめる。

二、其軸の位置決定の最近なもの、此の天文臺で一九〇五年迄の凡て最良の觀測から決定されたものは此遊星の軌道の平面に對する傾斜として二四度を與えてゐる。此の決定は爾來英國航海曆に組合されて來た。斯る傾きは季節をして殆ど我が地球の相對物たらしめる。但しかの軌道離心率は彼等季節を相異つて反對に位置せしめる。

三、その年は地球の日で云へば六八七年より成り、それ自身の日で六六九日より成る。

四、それは極冠を示めし、そは火星の住人（住者ありませば）の夏に溶解し再び火星住人の冬に形ち作る。

五、出來つゝある極冠は不定形の外形である。それは霧の如き白色にして、徐々周圍の陸地に吞まれる。

六、一方に於て解けつゝある極冠は極冠と共に退く綠色の帶に由り境界されてゐる。此れはそれが冠の崩壞の產物たる事を示めてゐる。此事實はそれが二酸化炭素に由り形ち作られた云ふ可能性を除外する。何となれば彼の物質は一氣壓或はそれ以下の壓力にては例へば火星に存在するが如き、直ちに固體から瓦斯の状態に變はる。それ故我等には我等が知る此の現象を生じ得る唯一の物質として水のみ殘されるのである。

七、極の雪がなす大なる溶解は彼等の量が其の擴がりに反

してそれ程大でない事を示めし而して、其の堆積が乏しい事を示めてゐる。

八、表面は赤色の赭土と青綠色の地方とに區別される、赤色がかつた縁は餘程より廣大である。之れは我が地球の赤みが、つた砂漠の如き見えを有し一般の働きから其構造として砂漠なる事を指し示めすのである。

九、青綠色の地域は水の擴がり認められるのが常であるが、今やかくの如きものにして知られてゐない。何となれば彼等擴がりは場所に於て永久的な線及點で縫ひ合はされてゐる。それは彼等が湖や海であれば斯くはあり得ないのである。

一〇、彼等は火星住人の季節に連れて變化する、冬の月々の間にはさめ、夏の月々の間には色合が濃くなる。彼等是要するに植物の如く行ふ、そして凡ての證據は彼等の性質として植物たるべく指示する。

一一、極冠が溶解し、又再び形ち作らるゝの事實は上述の如く、火星住人の大氣中に水蒸氣の存在するを示めすものである。

一二、此の水蒸氣は臺員の一人なるスリファ博士の撮られた分光器寫眞に記録されてゐる。月と火星の同じ高度のスペクトルが同じ感光板上に記録された。そして其の結果として生ずる水蒸氣の「H」帶密度は火星のスペクトルに於てより

著しい事を證せられた。八枚の感光板が凡てに於て用ゐられた。

一三、此の遊星の表面變化の事實は火星の大氣存在を確めるものである。

一四、視表面の縁の周圍に見える端光は同じ事柄に對し證據を供する。

一五、此遊星の低き反射能は此の大氣の密度は我地球の大氣より甚だ低きものなる事を證する。

一六、是等の數箇の事實は凡て火星が大氣を有して居る事を示めすものである。それが水蒸氣を含む故に瓦斯の運動說から恐らく、より重い瓦斯體即ち窒素、酸素、炭酸瓦斯等をも含むであらう。

一七、水蒸氣の量が地上他の何物よりも砂漠の上の水蒸氣によく符合する事。

一八、此の遊星上の唯一の水は大氣中ミ極の雪中に存在する事。それ故に火星は水の無いので困つてゐる遊星であつて唯極冠の溶解に由つてのみ水の表面分布を得るに過ぎない。

極冠は灰白の霜又は雪に過ぎないミ云ふ事實に基く彼等（極冠）の活動から我等は火星上の温度は決して甚だ低いものではないミ云ふ第一の證據を有するのである。

一九、雪の冠は緯度八十七度時として更に遙か迄に至れば

消失するミ云ふ事實は其温度は時としては明かに甚だ高い事を示めすものである。

二〇、此の研究の結果は火星の平均温度は多分約攝氏八度あるミ云ふ事を示めす爲めである。之れは地球の平均温度——普通攝氏一五度として考へらる——から稍然し餘り甚しからざる寒さである。

二一、視表面の全光景は他の結論を確める。極冠の溶解が始まる時期及びそれが終る時、我等の曆の八月二十日頃に相當する時——之れこそ來るべき冬の初雪が現はれる時期である——凡て其の平均温度は丁度理論的方法がきめる程らしいミ示めす傾がある。

二二、然し乍ら夏ミ冬ミの間の温度の變化は火星住人の空氣が稀薄なミ云ふ理由の爲めに多大でなければならぬ。そして之れは又六十度以下の緯度——それ迄は年の初雪の降る時に其の最初の降雪が達するの事實からも亦多大であるミ見える。

二三、然し乍ら其空氣の稀薄は植物に妨害ミはならない火星の氣候は山頂のそれでなく、高原のそれであり、甚だ困難な問題である。

是等二箇の事實即ち充分な水ミ不都合なき温暖からして我等は火星上の條件は或る種の有機物の生存に全く適合してゐる。

る事を知るのである。之れローエル天文臺に於ける過去十五年間の觀測が確立した結果の一つである。

我等は最も通俗的興味のある事柄の一つ、かの火星上有機的生命が現在居住せるや否やの問題に今や移り行く。有機的生命は其生存に水を必要とする。此水が火星上に存在する事を我等は見ると。然し非常に僅少の量しか存しない爲めに若し何等かの種類の生命が彼處に存するにせよそれは主として水の供給の爲めに兩極の雪の半年毎の溶解に待たなければならぬ。何んこなれば火星の殘の部分(兩極以外の)の上には何等水の表面集合體がないからである。さて一八七七年のスキアバレイに始まりフラグスタフに於ける以來非常に擴張された數年間は次の事を示めた――

二四、火星の表面は數條の線と數箇の點との美しい網叢で奇妙に網に作られてゐる。

二五、火星をよく見れば見る程此の奇怪な網はそれ自身をよりよく露すのである、それは全く恰も火星の全表面に面紗カネサキがせられたかの如くである。

二六、網叢の線は各々驚く程眞直で、恰も彼等が最高の正確を以つて敷かれたかの如くである。

二七、彼等の平均幅員は明かに十哩乃至十五哩で、確かにそれよりも大きくはない。そしてより美しい種類のものは一

哩又は二哩に降つてゐる。

二八、彼等が相會する場所は小さな、圓い暗い點であつて記者はそれを窪地 *Oases* と呼んでゐる。

二九、彼等の外觀は甚しく幾何學的であつて、其の表面上に於ける人工カク云ひ得べくんばを暗示するものである。

三〇、此の如く一つの極冠で現された現象の六箇月後に一つの正規な波が反對の方向にある視表面の下方に當る他の極冠から起る。かく火星住人の一年毎に暗からしめる二箇の波が交互にカナル組織を一冠から他冠へ影響を與へる。此の律動的振動は外觀上火星の各季節に正確に調和されてゐる。

三一、彼の營地も一つの同じ正規な變化をなすものである最も些細な目釘接手から彼等は全く大きな圓い點に發展する、それから丁度善い時に再び以前の狀態に變はるのである。

私は前に「此處に事實がある」と述べたが、今や私は「此處に結論がある」と附言する。若し或人が初めに此の線と點との網叢の外觀を次にその規則的な行動を考へるにすれば、彼は其の幾何學主義が何か自然的過程に由るかゝる程度の因果關係の存する事を排する事而して他方かくの如きは正しく兩極の雪の溶解による人工的灌溉系統が装ふ光景である事を認めるでせう。水はそれが溶解せらるゝ頃に得らるゝに過ぎないから、又水は何か有機的生命の爲めに得らるゝものであるか

ら、水が得られるのは著しい極冠に刻目を附けてこられ、而して只そのみに由るものであらう。その故に若し火星に住居し得べくば、それは正しく我等が見たい希望する様な、る奇怪な組織であり、且つ唯かゝる説明に由つてのみそれは事實を説明し得る様に見えるのである。

此等の條は所謂火星の運河である。我等が見るのは巧妙な造り方自身であるとは假想されてゐない。反對に是等の條の行動は我等が眺めてゐるものは植物である事を指し示めすものである。さて植物生長は水の供給に由つてのみ惹起する。

我等の見る所はナイル河の年々の洪水に似てゐる。それに就いては空中からの見物人にまつては河自身は見るに餘りに狭過ぎ唯其の兩岸の青々した草木のある國のみが見えるであらう。之れこそ我等が火星の場合にそうだと考へる所である。

然しながら水は可能らしく見える、蓋或る導水渠にて導かるるか、或は然らざるか科學は述べ得ないけれども、その結果は容易に看取し得られ、又かゝる灌漑系統が示めすべき所に正確に一致してゐるが爲めに、我等は止むなく、かくの如きは誠にその眞因 *Vera Causa* なりと信ぜざるを得ないのである是等凡てに對しては私は多くフラグ斯塔フの天文學者の親切に負ふてゐる。

是等の前提からの演繹は簡單にして複雑でない。火星上の植

物の存在が彼處の暗き印の唯一の合理的説明であるのは彼等の外觀からのみならず、彼等が行ふ火星人の一年の各繼續する季節に於ける變化の追加的事實に由つても考へられる。一植物區系 *Flora* の存在は一區域の動物 *Fauna* ありと思はしめる動機である。植物にして若し動物の生命を支ふるので無ければ何の用途があらうぞ——而して若し彼處の諸動物にして萬一その中に智的動物生命換言せば此處の人類が我が地球に對して有つてゐる様な同じ關係を火星に對して有つべき動物が居ないとするならば、それは奇怪な事云はねばならぬ。尙ほ更に極に源してゐる水は季節が進むに連れて赤道の方へ下つて行く。それは此の進行を重力の作用に頼らずして爲すのである。そしてそれが人工的(自然的の對としての人工)に其の目的を遂行する様に助けられたと推測される事は避け難い事である。尙それは一様に進歩するが其様は自然の疾走する川の様でなく或點迄其の移轉は助けられてゐる。如何にして又如何なる方法に由るものでせう？

ローエルは躊躇する事なく彼の説明を與へ結論を述べてゐる。彼の著「生命の住處としての火星」中に彼は次の如く云つてゐる——

我等は何等思索には耽らなかつた。我等は注意深く此の場合に於ける情況證據を考へた。そして我等はそれが智識——



それはかの他の球上に活動し、他の何物にも兩立しないもの——を指し示めす云ふ事を發見した。我等は其の原因を發見したと信するに於て正當なるを證せられた。そして我等の結論は之れである。即ち望遠鏡が我等に啓示する之等奇妙な恰好はかの生命を證する事、而して決して侮るべからざる階級の生命が現在此の遊星に住居してゐる事之れである。かく我等が細かに見た觀測は火星が現今住居されてゐるこの結論に我等を導くのみならず、彼等は我等を導いて是等住民は相知り合ふの價值がある階級の者である云ふ更に進んだ結論に至らしめる。我等に於て更に重大なるは彼等の存在の事實が進化の途上に於て彼等が我等よりも優つてゐる云ふ事に由つて益々興味を多大ならしめる云ふ事である。……我等が彼等と何かより直接な方法に由つて話し合ふ様になるか否かは、今日の科學が何等決定すべき基礎を有しない問題である。

かゝる人物に由り、又かゝる科學的學識に由つて爲された此の最後の觀測は應々愚鈍にも彼に擲たれた歸罪——即ち彼はむやみに火星に魅かれてゐて、漠然と想像を逞うせしめ、

彼の有名な古典「ガリバーの旅行記」"Gulliver's Travels"に於けるデイン・スウィフトに對抗せんことを求めたこの歸罪から彼を救ふものである。

然し博士ローエルに由り裏書された論理にもかゝらず、其の住まはるゝ事に就いてのみならず、亦實際の居住に關してさえも、如何に容易に我等は科學的研究から小説的話の信頼し難い途へ轉ずるかを知れば、我等は躊躇の感を以つて火星に近づかねばならぬ。エディンバラ評論一八九八年十月號に次の話が載つてゐる。何んでもつまらなく聞きたがる種類の一婦人が或る有名な天文學者に邂逅して、一つの疑問を尋ねてよいかと懇願した。「左様、御夫人。若しそれが火星の事でなければ」、と彼は答へた。それは火星の事であつたのだ俗的氣分は推量の魅力で飾つた哲學を喜ぶものである。何事も考へ得べきものは興味があらう。然し科學は證據の巖の上に基礎を有するものである。多くの觀測を有して假定説を少ししか有せないのは、觀測を多く有せないで、多くの假定説を有するより遙かに優つてゐる。かゝる異狀の結論は人が火星と其の觀測者を餘りに輕卒に取扱ひ易い云ふ様に述べら

れて來た。そして多くの事が俗的氣分を満足せしめる様に書かれ、又記録され來つたことは云へ、私は天文學者等が火星に關して眞理の床岩に正しく臥する多くの事柄を記録した事を知る者である。世界が所謂運河が火星に存在するの初めの暗示を受けたのは一八七七年にスキアパレリに由つて與へられたのである。然しながら世界は其の啓示に對して準備が整つてゐなかつた。そして他の者等が疑つて居る間にスキアパレリは發見から發見へ進んで行つた。一八七九年に彼の所謂カナーリは一八七七年に於けるよりもより眞直により狭く現はれた。之れは彼等に於て變化があつた爲で無く寧ろ彼自身の看取の能力の改良から來たものである。何となれば眼は一度見た事は二回目には常により善く見得るからである。最後に其年の終頃彼は或る夕方驚く可き現象として彼をさえ感動せしめた事を觀測した。即ち多くの運河の一が巻きついてをり、二箇の對の運河が前には唯一箇の運河を示めた所に急に現れた。其の平行は非常に完全であつた爲めに彼は一つの幻視だと思ふんだ。然し乍ら彼は彼の望遠鏡或は對眼鏡ズを變へても何物も發見し得なかつた。此の現象は明かに

眞實であつた。其の次の衝に當つて彼は萬一運よくかの奇妙な出來事の反覆を記録すべきかを見んものと思ひ見た。それから彼は彼等の二十が二重になつてゐるのを見た。之れは彼れ自身の驚愕の頂點を冠した。そして他の人々が容易に信ぜない事を増すのも必要な事である、何となれば他の人は誰も「運河」が二重であるのを見る事はさて置き、未だ「運河」さえ見るに少しも成功して居なかつたからである。彼は九年の間彼の幻を唯自ら祕して獨り働いた。一八八六年に至る迄彼以外誰も運河を見なかつたのである。其年の四月にナイス（佛國）のペロータンがナイスの二十九吋口径の大望遠鏡が据付けられた時に初めて見たのである。然し此の鏡を以つてしても彼等が發見される迄に數日を要したのである。然し忽ちペロータンはフイソン Phison ン稱せられた彼等の一を發見した彼の助手トロン Mr. Thollon はそれを直ぐ後に見た。其後彼等は多くの外のもの——或るものは單一なもの或るものは二重なもの——を見分ける様になつて大體スキアパレリが引いた程に迄なつた。其時以來他の觀測者等も引き續いて彼等を看付けて其の數は凡ての衝毎に増加しつゝある。

博士ローエル曰く『火星が生物に住まはれてゐる様に見えることは此の問題に關する最後の言葉でなくて最初の言葉である。我等は今や事物を新觀察點より眺め、且つ單に一地方的觀察をなすのみならず、廣い一瞥をなさなければならぬ。一地方的觀察と云ふ意は地球的觀察を云ふ。人類は凡てその驕れる屬性を以つてしても結局、鎖の一環に過ぎないであらう』  
 ミ。私はテニスンの哲學を好む——それに耳傾けられよ。

我が心中の此眞理は繰返して云ふ

無邊際宇宙に於ては

無限の善と無限の惡と存す

汝は此の希望と恐怖の鑄型より

我等を彼方幾億萬の地球に於ける

彼の諸峰よりも堂々たる者となし得る考ふるや？

然し我等をして停立せしめよ。我等彼の「證據を通り越した斷言は大過失なるのみならず、一つの罪惡である」この警句を記憶しよう。ベーコンは「眞理」に關する論文中に「一つの

虚言を交へる事は常に面白味を加える」と眞を述べた。それは惡意より出でた虚言を意味しなかつた。寧ろ證據よりも足の速い大膽な記述を意味した。曲らぬ論證は一般向きでない然し名望と機智に富んだ天文學者が火星住民の高度を論じようとするか、又は若し我等にサハラ砂漠上に或有力な三角形又は五角形を建て、それを幾萬の電光で輝かしめ、それから我等の隣の火星からの結果を見守らうと我等に告げる者あらば一の講堂を聴衆で充し得るであらう。

萬事が發見せられ來つたことを考へる事は甚だ大なる誤謬である。我等は我等の地平線が世界の境界だと考へもしよう。時が進むに連れて、そして思想家が考へ続け、智識が益々進むに連れて昨日の地平線なりしものは今日の我等の地平線にあらぬに至り、而して明日の地平線は兩方より尙異つたものとなりかくて「時の休止する事なき海」は其の海濱に時としては價值なき海草を時としては價貴き眞珠を、そして尙ほ他の時には奇妙な漂着物——それは磨いて無い寶石又は唯の粗末ながらくたでもあり得る——を投げるものである。

此の世の生命と彼方の大なる生命との間に垂れをる彼の入

り込めぬ幕の此方にあるローエルにまつては時は愈々更け且つ暗黒を増した、そして一九一六年十一月十二日、黄金の鍵は彼の爲めに永遠の宮を開いたのであつた。其の時死—黒の駱駝—が彼の門口に跪いたのであつた。——私は美しい東洋の比喩を用ゐる。如何なる話に名高い墓所も又大理石の半身像も飛び去る息を其の住家に歸らす事は出来ない。神は彼の働き手を葬り給ふ。而し彼等の事業は葬り去り給はない。それは益々進み行く、そして我等の智識は蓄積された思想と無數の心靈の經驗である。而して之等無數の心靈の中にあつてローエルは重要以上の位置を充たしてゐる。(TE 生譯す)

(終り)

天空を精査する事によつて吾人は彼處より吾人の知る何物よりも遙に驚異すべき未來を讀む事を得べし。教授ローエル

## 謹 賦 勅 題

和歌山 吉 田 裕

周空大塊氣網緼  
天象昭懸歲首曉

鍾運日東冠國群  
德星如月照山雲

## 宇宙の真相

小野 尙次

一九二三年は來た。宇宙は開ける。過去幾千年來の間、人類を悩まして來た宇宙も、人類の苦悶の血潮も、努力の熱汗の結晶たる吾人の振り上げる鐵鎚の一撃一打の前には粉碎されずば止むまい。

ああ。空に照つてゐる、満ちた月。

この机の傍で、己が眠らずに

眞夜中を過したのは幾度だらう。

この己の苦をお前の照すのが今宵を終であれば好いに。

悲しけな友よ。さう云ふ晩にお前は

色々の書物や紙の上に照つてゐた。

ああ。お前のその可愛らしい光の下に、

高い山の脊を歩くこゝは出来まいか。

あらゆる知識の塵の中から蟬脱して、

お前の露を浴びて體を直すこゝは出来まいか。

(ゲエテ)

眞理は法王の有ならず、學者の有ならず。之を愛するもののみ有り。